

共通基礎課程コンピテンシー3.0 コンピテンス領域Ⅱに基づく

「3.コンピテンス領域Ⅱ空間やモノ、体験、関係性のデザイン」に関する教材作成の取組

分担研究者 柴崎智美（埼玉医科大学医学部・教授）

【研究要旨】

本研究では、共通基礎過程コンピテンシー3.0「Ⅱ. 科学的思考とその展開 3. 空間やモノ、体験、関係性のデザインに関する多様な手法を利用できる」に関連する教材作成を目指し、「人の生活を考える上で、住環境や建築がどのような影響を与えるかを知ることを通して、人が心地よいと感じられたり、自分らしくいられる住環境や建築を提案できる。」を学習目標として、建築の専門家である大学教員による3つの講演と3つのグループワークを1日で行う遠隔でのワークショップ形式の教育プログラムを計画し、医学部4年生に試行的に実施した。終了後に学習目標の達成度を評価するための記述課題とポストアンケートを実施した。提出された課題からは、住環境を考慮した具体的な方策が提案されており、特に病院については、観葉植物、写真、星空などより多くの具体的な工夫が記述された。ポストアンケートでは、新しい気づきがあった、将来役に立つと思った、環境が人の暮らしに及ぼす影響について理解できた、積極的に参加した4つ全ての質問に肯定的に回答した割合は95%を超えていた。建築の専門家からの講義と演習を導入することで、期待される学修成果が得られることが示唆された。

A. 研究目的

共通基礎過程コンピテンシー3.0、「Ⅱ. 科学的思考とその展開 3. 空間やモノ、体験、関係性のデザインに関する多様な手法を利用できる」に該当する教育を実装化するために、教育プログラムを開発し、教育を実践することを通して、その成果、課題を明らかにすることを目的とする。

B. 研究方法

建築・生活環境デザインを専門とする教員の協力のもと、共通基礎過程コンピテンシーⅡ.3に関する教育目標、教育方略を取り入れた教材（講義と演習のプログラム）を作成し、医学部医学科4年生を対象に実施した。

教育目標は、「人の生活を考える上で、住環境や建築がどのような影響を与えるかを知ることを通して、人が心地よいと感じられたり、自分らしくいられる住環境や建築を提案できる。」とし、原則、共通基礎過程に示された内容を踏襲した(表1)。

表1. 共通基礎課程の教育目標

- ・住環境や建築、ユニバーサルデザインと人の生活について説明できる
- ・住宅改造の事例を列挙できる
- ・人が心地よいと感じられる住環境や建築、ユニバーサルデザインを提案できる

教育方略は、遠隔の（Zoomを用いた）ワークショップ形式で、3つの講演と3つの小グループ学習を実施した(表2)。

表2. 講演、グループワークのテーマ

講演1. 「病院建築の歴史と今後の展望」 小グループワークテーマ1「ホスピタルアート」 SGD1「誰のため、何を期待して制作するのか」 SGD2「アートにチャレンジ」 講演2. 「施設の中で暮らすということを考える」 講演3. 「地域包括ケアと生活環境デザイン」 小グループワークテーマ2「食べることを考える」 SGD3「食べるということの意味」
--

3つの講演においては、それぞれ講演終了後に、Zoomのチャット機能を利用して学生からの質問を受け付け、講師から回答した。グループワークではGoogle Slidesを用いてプロダクトを作成し、パワーポイントにダウンロードして提出を求めた。ワーク終了後、講師が選んだ3~4グループについて学生がプロダクトについて説明し、講師からの講評を行った。

講演1の内容は、現代の病院建築の原型であるモダニズム建築としての病院建築は医療を行う上での効率性が、患者の快適性・居住性・主体性・患者自身の治癒する力の助長よりも優先されていること、モダニズム以前のパビリオン式病院の設計原理とアート・イン・ホスピタルは空間のデザインによる患者の癒しの役割があること、ナイチンゲールの「病院覚え書き」に記載された病棟の構造とその意味、サナトリウム建築やアート・イン・ホスピタルの事例の紹介、病院におけるアートの可能性についてである。

講演1の後には、「ホスピタルアート」をテーマに、「誰のため、何を期待して制作するのか」についてGoogle Slidesに意見を出し合い、KJ法でまとめた(SGD1)。次に「アートにチャレンジ」をテーマにGD1で検討した中から年代とコンセプトを選択し、ホスピタルアートを模擬的に体験した(SGD2)。このワークでは無料の素材を事前に準備し、利用することを可能とした。

講演2の内容は、従来型特別養護老人ホーム、ユニット型特別養護老人ホームの構造の紹介、ユニット型特別養護老人ホームにおける空間の段階的な構成（プライベート、セミ・プライベート、セミ・パブリック・パブリック）の事例の紹介、それぞれの意味の説明、施設から住まいへと価値観が変化していることについてである。

講演3の内容は、医療・福祉・建築の連携で何ができるかの問のもと、「いえ」の視点から、ケアの一環として住まいづくりに取り組む工務店の事例の紹介、「施設」の視点から、施設を「住まい」に変えていく（居住性を向上させる、地域に開く）取組事例の紹介、場づくりにおいて大切なことの提示と場づくりの事例の紹介、「まち」の視点から、建物・家はまちを作る要素であり環境を丁寧に読み解いて設計することやその「間」として建物のあいだのアクティビティの意義、ひとつひとつの関わり合いの中で自然に支え合いと学び合いが生まれ、暮らしの環境をつくっていることについてである。

講演3の後に、「食べる」ということについて、食べる前の準備から食事中、食事を終了するまでに起こりうることを書き出し、時系列に並べ、食べるということの持つ意味を考えて貰った。

全ての演習終了後に「人の生活の質を改善するために、住環境を考慮した方策を具体的に提案してください。病院、ユニット型特別養護老人ホームなどの入所施設、地域の居場所など、ひとつ場所を設定して記述してください。（200字以上）」の課題に本学の学習マネジメントシステムであるWebClass上で回答を求めた。また、演習に関するアンケートとして「新しい気づきがあった」、「将来役に立つと思った」、「環境が人の暮らしに及ぼす影響について理解できた」、「積極的に参加した」の4項目についての選択式の問題と感想を自由記述として求めた。これらの回答については、学生の氏名を匿名化した上で集計し、課題の記載内容をText Minig Studioを用いて、単語頻出解析とことばネットワーク分析を行い学生の学びについて検討した。

(倫理面への配慮)

学生には、実習前に本研究の主旨を説明の上で協力を依頼し、WebClass上で同意を得て、匿名化した上で分析を行った。

C. 研究結果

講演と演習を行い、学生は、活発に小グループ学習を行った。当日実習に参加して132名の学生すべてが課題に回答した。(図1)。

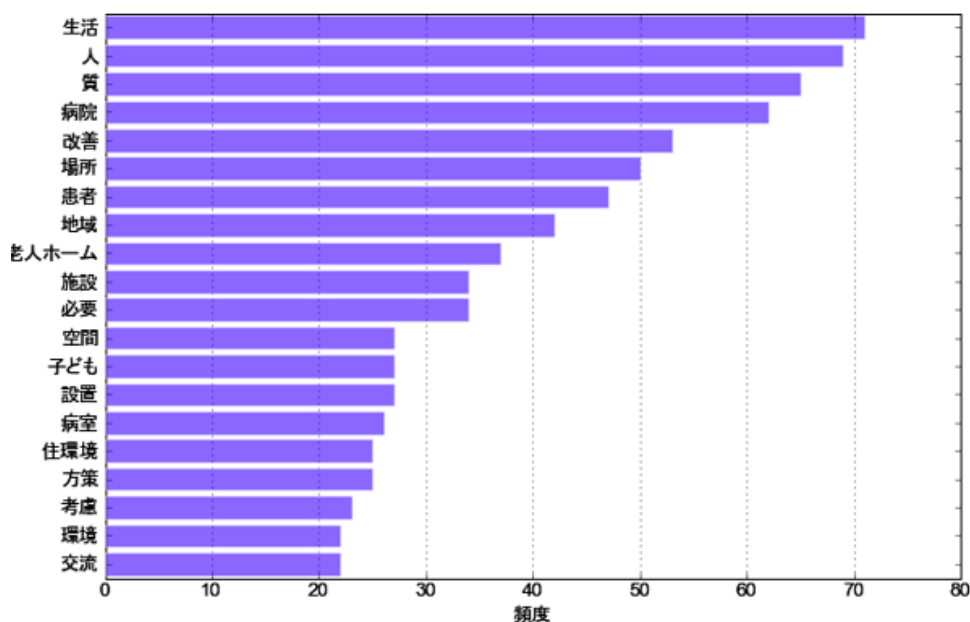
1. 課題の分析

実習終了後に記載された「人の生活の質を改善するために、住環境を考慮した方策を具体的に提案してください。病院、ユニット型特別養護老人ホームなどの入所施設、地域の居場所など、ひとつ場所を設定して記述してください。(200字以上)」の課題を分析したところ、平均文字数283.9文字、総文章数676、延べ単語数7872であった。品詞別出現回数は、多い順に名詞5149、動詞1536、形容動詞323、副詞264、形容詞226であった。

1) 単語頻度解析

名詞のみに限定して単語頻度解析を実施したところ、多かった単語は、生活(72)、人(69)、質(65)、病院(62)、改善(53)、場所(50)、患者(47)、地域(42)、老人ホーム(37)、施設(34)、必要(34)であった。課題文に含まれていない単語は患者、必要であった。(図1)

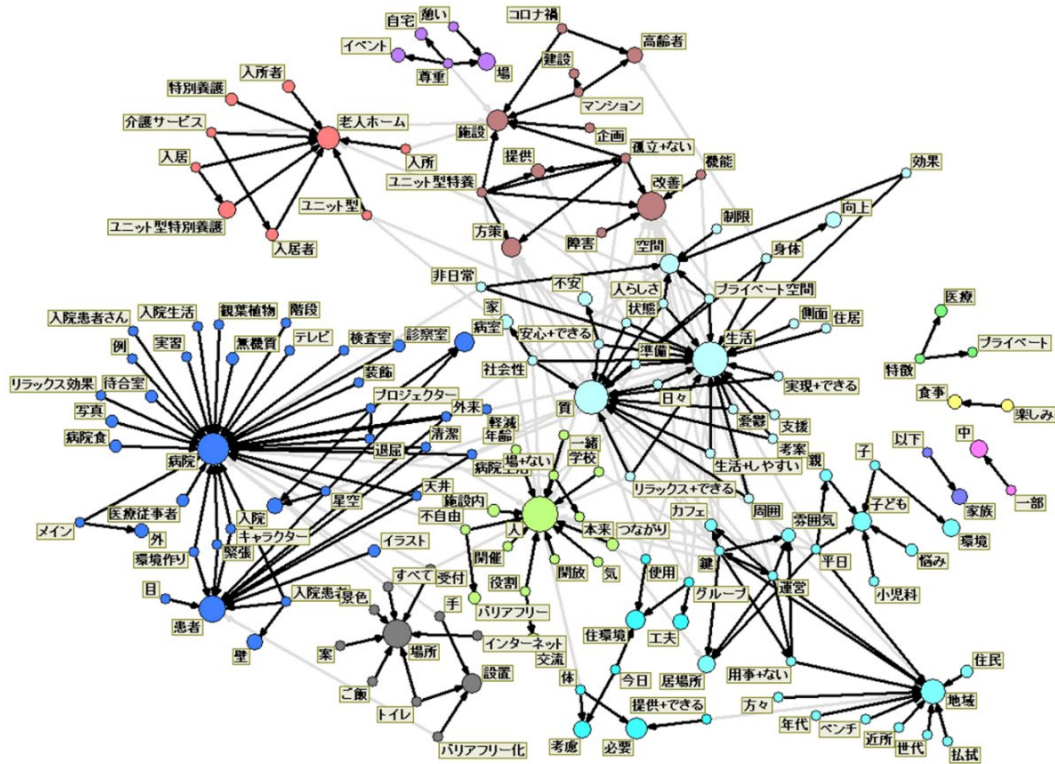
図1. 課題レポートの単語頻度解析.



2) ことばネットワーク分析

課題に提示した病院、老人ホーム、施設、地域とつながりのあるのは、病院では、環境作り、緊張、入院を共有して患者とつながっていた。さらに、観葉植物、テレビ、写真、リラックス効果、装飾、プロジェクター、星空などさまざまな工夫がつながっていた。施設と老人ホームには、孤立、コロナ禍、ユニット型、企画がつながっていた。地域には、世代、近所、ベンチ、住民、年代のほか、居場所、鍵、運営、雰囲気、住環境、考慮、必要、提供+できるなど様々なことばがつながっていた。(図2)

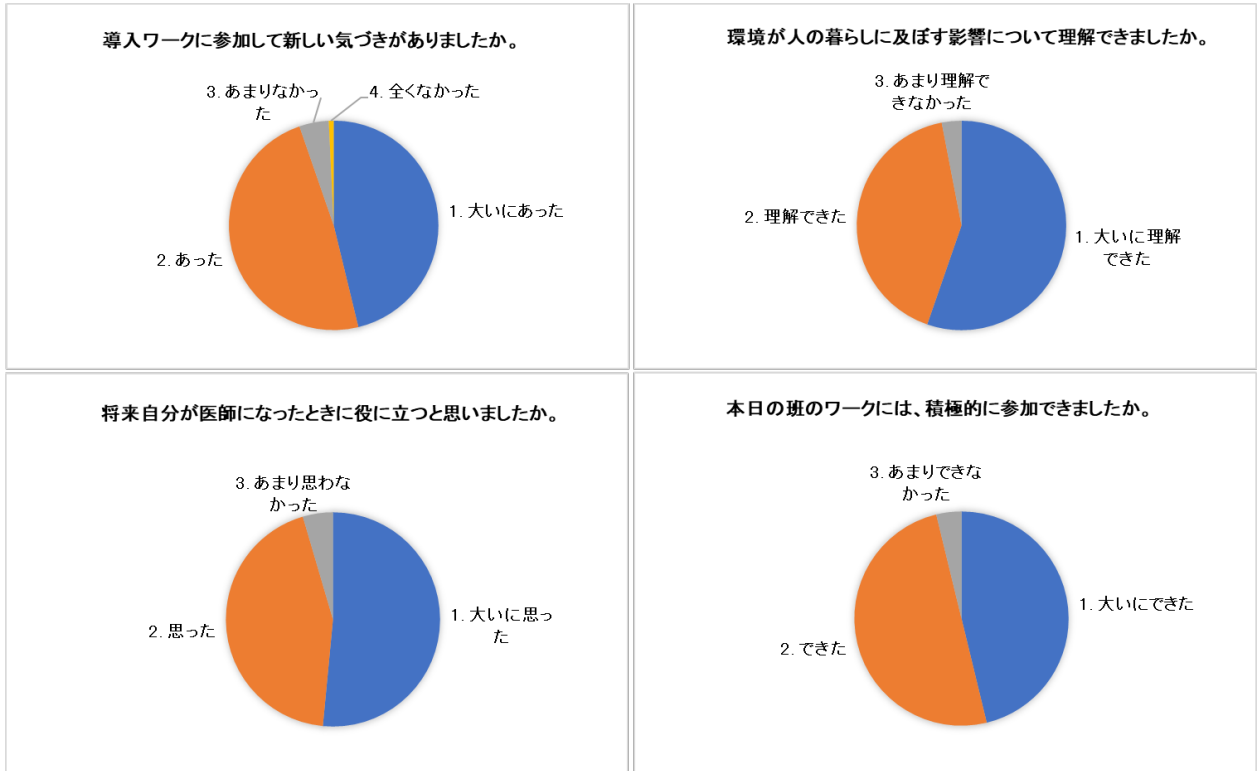
図2. 課題レポートのことばネットワーク



2. 演習後のアンケート

ポストアンケートでは、新しい気づきがあった、将来役に立つと思った、環境が人の暮らしに及ぼす影響について理解できた、積極的に参加した4つ全ての質問で、肯定的に回答した割合は95%を超えていた。中でも「環境が人の暮らしに及ぼす影響について大いに理解できた」と「将来自分が医師になったときに大いに役に立つと思った」は50%以上を占めた。(図3)

図3. 演習に関するアンケート調査結果



D. 考察

共通基礎過程コンピテンシー3.0「Ⅱ. 科学的思考とその展開 3. 空間やモノ、体験、関係性のデザインに関する多様な手法を利用できる」に関しては、これまで保健医療福祉専門職養成課程では、正規カリキュラムとして実施されることは少ない。今回建築を専門とする教員の協力のもとに講義とグループワークからなるプログラムを作成した。

講演では、医学生が対象であることを重視し、病院建築の歴史や現在の感染症流行予防との関連を意識した病院における衛生環境にも着目した内容とし、具体的な人との関わりのテーマとして、ホスピタルアートを取り上げた。ホスピタルアートは、学生にとっては、患者として経験したことはあるものの、医学部ではそのような視点での教育が行われてこなかったことから、「新鮮な経験である」、「医師となって役に立つ」などの肯定的な意見が得られたものと考えた。また、事後の課題では、共通基礎課程コンピテンシーに明示された課題をテーマとしたが、単語頻度解析では、課題に含まれる単語が多く、具体的な工夫としてあげられた具体的な提案を示す単語は、学生によって多様であったことが推測された。特に病院に対する具体的な方策が多く認められ、実習中の講義やワークと医学生であり病院が身近であったことなどが関係しているものと思われた。また、演習で施設での生活、生活環境をデザインするなどの課題に取り組んだことから、地域の居場所づくりに役立つ工夫も提案されていた。学生から多様な具体案が提案されたことは、学生ひとりひとりの価値観の多様性やこれまでの経験の個別性にも対応したアプローチができたことを示唆していると考えた。

実習後のアンケートからは、実習やその学びについての肯定的な意見が95%を超えて高かった。医師を目指す学生にとって病院は医療を行う場というイメージが強いと考えられ、病院は患者が療養する、子供達が不安をもってそこにいる場であることや施設が高齢者障害者の利用する生活や居住する場所であり、快適に暮らすためにさまざまな工夫が必要であるといったこれまで気づけなかった視点に気づいた学生がある一定数いたことを意味していると考えた。

以上より、今回作成した教育プログラムは共通基礎課程コンピテンシー3.0に基づく学修成果の達成が期待されるものと考えられた。今後、共通基礎課程に親和性の高い建築の専門家による講演に関するDVDを作成するなど共通教材の作成を進めることで、カリキュラムの導入が容易になることが推察された。デザイン、建築物などを用いて教材を作成する場合には、著作権等の課題を解決する必要がある、今後さらなる検討が必要である。

E. 結論

共通基礎過程コンピテンシー3.0「Ⅱ. 科学的思考とその展開 3. 空間やモノ、体験、関係性のデザインに関する多様な手法を利用できる」に関して、教材の一例を作成した。建築の専門家からの講義と演習形式を導入することで、期待される学修成果が得られることが示唆された。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

(発表誌名巻号・頁・発行年等も記入)

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

1) 柴崎智美, 田口孝行. 第80回日本公衆衛生学会シンポジウム: 地域共生社会で活躍する対人支援職種の育成 - 共通基礎課程をめぐるチャレンジャー. 2021年12月(東京)

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし